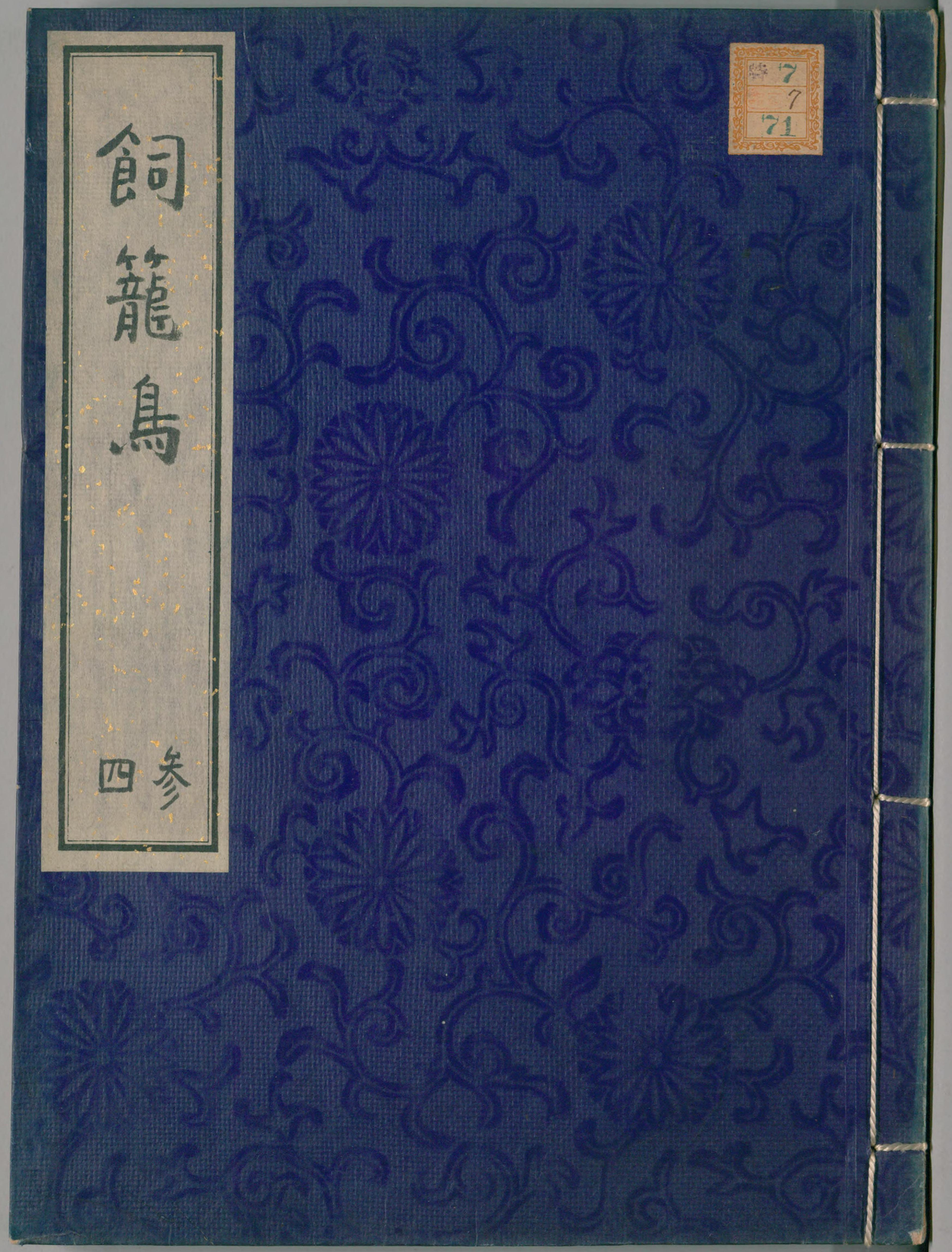


飼籠鳥

四参

7
7
71

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

特別 4寺7-71

帝國圖書館藏

伊藤篤太郎記

佐藤成裕著

飼籠鳥

卷之參
卷之四

昭和 年 月 日

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71

ガラス使用

飼籠鳥飼法部目録第三巻

勝成裕曰凡ッ諸鳥を飼ふ者は其煩の出るに
及ては藥方を施すにあらされハ治しかるし
且又預小其養を施すときは其病と成る
事すくなし是故小藥方を能く識て飼ふ
ときハ変死乃患なり事へし其諸鳥を飼ふ
乃法大抵此書の如し巧者なり者小於てハ
取捨自ラあ[illegible]

飼法　竹水
蒔餌籠　掲籠
管籠　覆籠
籠覆器　宿籠
庭籠　巣草
雛養　雛飼
浴水　變羽
捕獲　羽糊鳥
駮笛　打綱
脛拂　自被
灘鳩縛　軒打
籠落　丁落
煎爪
山雀籠
舞籠
止木
巣鳥
蜘蛛
渡里
綱鳥
雉綱
覆綱
筧落
鶫落
鴨鴈落　雁鳧落
糯竿　寄笛
糯制

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71
ガラス使用

飼籠鳥飼法部目録 終

飼籠鳥巻之三

飼法部

嘗て藥餌の方を試るに大に益ある物は鷹の爪と云草なり漢名漆姑草なり此草ハ園圃此間廢陰の處に多く生ず其葉ハ杉の如く五辨の細小の白花を開く此葉を取て飼に磨合せて與ふ三五度を與れは其効あり又陰乾して細末して飼に入るもよし何の病にても能く治す事妙なりと次凡ゝ狂き諸病に用ひて大に効あるに故に京攝の養鳥家に此一味の藥を賣ひなり毎年土用の中に澤山に采て年中此用に備ふ是し

竹水

大瑠璃黄火焚の類飼の加減にて長壽なきのミならず時々病出て飼ひこゝし是にハ大なる當年の若竹を斫りて両節を止めて上の青皮を削去て幾箇も人糞の中に入置く事四五十日或又百日にして取出して能く洗浄し此筒をそつと二ツに破り中に清き水あれ此水をかしつ飼に雜ゝ置て與ふ是し別して佐々伊花雞此類此水なくんは長壽する事を得ることも久しく取り置きたるもあしく入用次第に取上ゆて新き水を用ゆ是し飼鳥家にて竹水と名て第一の秘方なり

剪爪

大鳥小鳥ともに爪長されハ物に引掛て折る事あり見て云て見よりしは是れを剪むにハ陽に向て日に映して見れハ透きたる所より剪力にて ⌒ 如此中の肉を除きて尖る様にきるべし爪の肉に掛れハ血出て殊外苦しむ透きたる所を肉なしとしるべし若又其肉に掛して血出る事あしハ線香にて切口を少し焼くなし志かれとも鳥に因て火氣我忌ミ又熱手含て足脚瞳る事あり或ハ六ツ先ツ圓くしていつまても尖りかぬる事あり尖さるも見てくるしき物なり扨又足脚の瞳たるに

鉄漿(ガハクロ)にて洗ひ或は冷茶にてあらふ人あれども此等は何の益あるに事なし時々水を浴せれば洗ふに及ばず水にて自然と愈る物なり

蒔飼籠

籠の制種々あり駒の如き夜中に飛踊る鳥は必ず曲籠を用ゆ是し上鳥は都て塗籠にて尾羽ばれば宜し文鳥十姉妹の類粒食此鳥は蒔飼籠を用ゆ鶉鴾は外籠にかゝる鸚哥の類銅絲の網籠にて破る事なし此他品々あれども其制度なし日々見て宜しき様考へて便理なる様用ゆ是し凡玩弄此器物は其人の意に委皆好む所に随て制すべし

揚籠

諸鳥庭籠にて巣こゝろ雌雄并に雛此籠にて先ゆ取る是し常の四輪より大に作り戸口を両口に付て前後より逐込む是し戸口も一ヶ所に大きくなるなり是にあらざれば追廻して鳥の傷となる故に今は皆此籠を用ゆ甚だ便理なり

山雀籠

返籠(くんとうこ)は三四尺位にて宜し五尺六尺の籠は鳥此為にならず春に至て目疾を生し又爪自ら脱ぶ事あり凡諸鳥を同じ者は只其鳥の堅固なるに事を欲すその鳥此傷を知て眼玩する事なれば迫時又破竹にて籠同にあらざるあり取扱て便

なれどもよくハ見へかたし

管籠(クダカゴ)

倭鶏(チヤボ)ハ第一尾羽を愛翫する物なり尾羽のきれ
ざる様ニ世ニいふ筥篭ハ低くして大キニ尾をすり
てあしく篭も随分細く尾の痛ぬ様ニ高く
制すべし

覆(フセ)籠

雛類の覆篭も諸方ニあれど不同あり濡雛の
巧ニ制したるあり

舞籠

鳩ハ聲音のミにあらで且ツ舞ハ一ツの賞翫ゆへ
早朝に舞篭に移し舞ハしむへし其高さ六七尺の
圓の中に輪を入る事灯燭の如く下ハ圓き
篭にして細沙を敷き晴天に外篭に移すべし
又網も家に納めて雨露にあてる事なかれ

籠覆器(コヲケ)

籠の大小ニ随ひて制すべし戸口処も銅網然る
ときハ羽損なし鶯ハ極く制度ありて制し候
にて声の響きよし是をば伝へて京攝
にて制巧ニ且美麗を極む昔後の覆紙
張ニて張りたるを安燈(アンドン)篭と云安燈篭覆
為なり冬月寒気凌がる小鳥ハ是にて暖之
暑中をおいかざし紗を張りて蚊蚋を防ぐ
よし

宿籠（トメコ）

文鳥千姉妹の類ニ於ケル無益ハ用ヲ板戸網戸
ヲ畫ハ網戸ニ於テ猫鼠の害なし此制も種々
あれとも多くハ皆雌雄連籠の入るなり暑
寒とも小用てよし志かれとも暑中ハ冷風の能
く吹透る処に無ハしと云

止木（トマリキ）

細きと太きと二本にてよし一本ハ少し高く
一ツ低くしてく龍ニ於テ龍ヲ是乃チ鳥の性なる
故に彼れか性に隨ふ一し俗に細れハ爪長く
なると云ハ非なり人とても山中に在て身ハ労
労されハ爪自ラ長くなるなり野鳥ハ山石樹間
ハ旋轉して身ハ労する故に爪の長る事
非し總て接骨木蜜梅を用て足脚の茱之
と云茱ともなしされとも中空にして極き木
なれハ用て尤も宜し庭籠なしハ杉の木を
太く圓く削りて志かしとする様にして用ヲ
宜し志なるされハ龍ニ於テ龍ヲ即体に
響きて宜しかしハ兎角糞の付ぬ様にして
こゝ所を付く宜し糞を踏先は自然と足ハ
病ハ生るものなり梅又大鳥ハ二庭籠の二度
狭に因て渡すとこゝも大抵ハ先ツ五寸四ツ位の
竹に草索の柔なるハ巻きて滑ぬ様に
して平に渡す一し糞付くしハ新に巻代て

よし孔雀白鵰も皆此大サにしくよし

庭籠

四隣より猫蛇の来らぬ様に覆く要界して
北は塞き南に向て作る為し大鳥は六尺に
長サ九尺位にして一方に銅網を張るなり後にも
荏きとて一尺斗の窓を附て常に其戸を開く
事なし卵を産したる時に是より様子を思ひ
見る為に銅網を張るは尤も要害にして大抵
細き竹は細に打もよし小鳥は必ず銅網に附
されは鼠狐の害は さけがたし敷(シキ)は練土にて塗
固めて鼠は防くべし何も沙変きなり孔雀
白鵰は沙は厚く志のされは常にて啄まて練土

は損ず孔雀は止木の上より卵は生ミ落ち故落て
多くは破る事なり此故に止木は取去て打藁は
変く時は卵落て破る事なし此時分は日々見回り
て卵は生ミ落ちは直に貝枚子にて見来りて
鶏に伏さしむる事り鶏も前日より日々に沐浴し
て羽表なきやうにして変くなり若し羽表なれは
其雛も移りて成長志かたし小鳥は三尺四方に
てもよし相思ふなれは六尺四方にてよし此卵を
生し雛を出せは小蟻澤山に来る事あり黄楊
なとは枝にて枝の中にて巣(スサル)答とて五
寸位のまろき籠を張付て巣草を引しむる此
木の根本に練土にて圓く塗る跡のことして水は

貯ふて小蛇ののりまぬ様にまへし又蛇を雛の
鳴し急ぎ出ゆくまて呑ミ盡く卵も亦ゝ呑ミ盡さ
拖まれは親子ともに取り盡ひ朝夕周旋して
此害を防く屋し
弔迫此此害なき庭籠を作る先ッ四本柱を立
て其間小細き柱を幾ッも立て其柱の左右も漕
を法する事鴨居のことし此漕の間小平尾を
落し込ふてそのまきまに練土にて塞き三面とも
に如此して其屋根も同く平尾をぎしとまり
を先て其上に板を以て並て屋根とし其中も
平尾をひしと敷き並て練土にて塗り固て前に
銅網を張る如此して拖にても鼠にても来て入る
屋さをしなし其銅網は至て太き銅線を用
ひ細きは鼠嚙ミ破るなりその銅線毛サ六尺に
切りて網ミたる時は四尺になるなり其積にて仕掛
て同も五分小網ひ屋し志うれとも小蛇は是にて
を入て害を為は但し又至て細き銅線にて三分
位に網むも宜し網細なれは小蛇も大抵は防く
那り此此の庭籠は世に来て作る者多し弔ヶ鼠
蛇の害を畏て是を作る也

巣草

巣草とは巣に作る物を云昔しは土草（トコロ）蘚の根を
掘りて洗浄して日乾して白く鬚のなしし
皆在方より出す是時加那阿利亜大に流れ出る

小函に後分より茅根を洗浄して日乾し一虎口（ヒトニキリ）
小策に一把となして養鳥家小おれ今は皆
是れを用てよしと次草 薢の根ハ更小なし
其茅根も他分の産は佳なれ其後分ハ之れ
細沙の地にて其根函に来に毛多し梅又野鳥
ハ何の木の葉或ハ竹の葉にても巣に作るなり庭
籠の鳥に函てハ此等の葉を引く事なし其茅
根を見て悦て直に引て巣に為すなり又小鳥
の茹（ヤハラ）かなる羽毛を与ふ是を巣の中小数て
卵を産す

巣鳥

雛を産る鳥ハ先是を志るべし何鳥にても雌雄
一根に見えて相分チ如き物ハ果して子を生ず
なり第一加那西利夜なり是レ雌雄相同し
第二に文鳥なり雌雄相同し第三小十姉妹之
檀特なり相思嶋鴨鶉鴿の類凡此類を推し
て志るべし志れども大鳥小函り雉の類鷄のごとき
ハ皆其論なし雛を為す和鳥も雛より養て庭
籠に移す時は雛を産る事疑ひなし一石の如く
雌雄相同しき物ハ雛をおもとしくとも仁の益なき
故人々心を付る事なし嘯なとは能く雛を為す
是にて考ふ可し

雛養

孔雀白鷴の類卵よりおれハ自然と粒食する物

なり志かれとも雛の中ハ米麥黍稷共に粗末と
して水に合て蒼飼のことくして与ふ也ハ後中にそ
よく化しやすし凡雛の中ハ大鳥小鳥小かきこれ
糞の甚だ大なるなりしと雖糞急に小さくなる時ハ
其雛不日して死す此時ハ飼の中に仕方すべし
此為に粗末にして蒼飼のごとくすれは大に
仕方志やすし仕方の効あれハ其糞急に大小
なるなり志かれとも多くは復しかたき物なり
小鳥雛となれハ肥前境の茶碗の中に蜘蛛を入
ゑて茶碗なれは滑にて亡去る事なし雌雄共
に此蜘蛛を与へて成長せしむ成長するに隨て
かし此蛛を入れ或は此蛛を入されは彼れら蒼に

食ふ如の飼をたとひ与ふ事なりて遂に此蛛
を食ふ事に及ぶ志かしされは此蛛のミ喰ひて
却て成長すも亦ハ可しかなへし是等ハ日々に
心を付て仕方を施し自得すべし工拙ハ此條に在て
書すも口傳すも盡しかたし

雛飼

嶋鴨鶻の児ハ蜘蛛にて成長して蒼飼に付る事
甚だ六ヶし是れも大抵にそたちたるハ早く親成
離して蜘蛛にて喰ひ三度に一度ハ蒼飼を指し
て喰せ又蜘蛛を蒼飼の中に指入れて食習を
時々遂に獨り飼に付くなり大に知るまて親に付つけ
亦く時ハ益々蒼飼に付るに骨折なり總して中鳥

以来ハ如此しく早く蓋間に移す一し瑠璃佐々伊の
ことき六ケしき小鳥さへ楊枝羽の中に取りて指明
小さく隠分出すに楊枝羽の況や庭籠は内なれハ日々に
根子成見えて生き時を待て取上て同立見しゑれ
是も大鳥は何ぞ小なる内に親成離す時ハ都て
成長志うゝし是れは親にあつけて捨てけるとも
何の世話なし蓋間は鳥ハ蜘蛛をいつ川まるも
食しく蓋間に付きうゝき故に親成離して
獨間とする為之

蜘蛛

蜘蛛ハ日々新に取る一し諸方は蘿に白く綱を
掛ける尻の大なる蜘蛛なり能く於蘿に多し
又一種嚢蜘蛛とて樹木の根本などに嚢の中に
ゆる成よしと須此外多と雖も宜しからぬ外の
蜘蛛成与へて恋に死しうるあり青蜘蛛なるとも
大鳥と雖も与へる事なれ必ず害あり

浴水

雛次第に成長されとも羽蓋多く生れて甚く
煩しさうとても浴に水成浴して是れ成るも
心得うゝし只霧成噴て漸々水成浴する程に
すへし春夏ハ二日ごとに浴されハ宜し尤英暑
此中ハ日々小毎度にても入るしからぬ是れも浴
しき日ハ忌ひ宜し

變羽

諸鳥我求ひる小ハ固より其性我見ゝ老
弱我辨まつし其觜ハ色の毛短くして見
事なりさるは老鳥なり是れ乃チ人の頂空
同し人も先ツ西方にて老弱早く取るが如し
次に足の容子にて却のづと光沢なく老したる
貌あり然る羽色も順して能き光沢なし志れ
とも癖と病の二ツハ急に志れかたし半日或は
一日も能く閑覚して此鳥ハ何の癖何の病
なると云事我案しかたし又斑入の諸鳥白く
跡しと雖も風切羽なしとは白く変する物にて
多くハ毬の時に至て元トに返る事あり毬我
強く変ん せさるは求て苦しかしは尤も児同

なれハ数遍毬我強くるとしるし又新鳥ハ同
辺に志るハ尚ヲ毬の事を考へ正しき屋し先ツ
白斑なしハ觜と爪と共に白くなりたるハ元へ
返る事なし又足まても変したるハ尚ヲ更に
宜し凡黒く変したるハ多くは毬の時元に返
る物なり其黄に変するを先ハ茶や柿なとにハ
変し易し志かれとも白や黄と同りの諸に
何しは黒も真黒にて觜足黒く爪も黒きハ總
黒とて鳥に固て跡し却て雛の中にハ常に
かわりて黒きあれとも毬我して返る事を知る
のミ案るに西京雑記曰南越王献白鷴黒鷴
各一隻賞見黒者久之漸變而為白蓋緒

未成長故黒耳後変為白也是れ乃チ雛にして
て毬にして変したる物にて白鵬は三ヶ毬を経て
漸く始て白毛を生ずれは斑入ハ希ノに此類あり
得て辨し択て求むるを第一とす除しきとて
漫に求る事形られ

渡里

諸鳥此里に出るは秋の彼岸の比より渡るなり
是れも羽分米沢なしとは七月の比より出る物
其山中の冷氣早く至て諸鳥絶て食物な
都故小里に出るのみなり此冬此氣ハ陰の方より
陽の方へ迫るに因て其氣に隨て鴫鳥鷹鶻
此類皆北より来る奥州金沢なしとは諸山道列

して居る故小島の出る事無し夥し又妹を亜
取る者尤も多し一日小百羽二百羽も取る事
あり皆小加良山加良にて皆殺して索に首を
挾ミ其儘日に乾し煮る冬月に至り毛を去り
て芋子牛蒡大根なと一同に合煮て食せ色々
此小島ある故に其味も品々ありて苦こもあり
金沢の南の山なと云変ハ高く多し皆取りて
冬月中の菜に貯ふ来る他国になき除しき
事なり其取方も甚く工者なり又南方に
て九十月の比に至て琉球の方より薩州の衛
と云変同しく山河と云変皆南方へ出渡りて
暖地なり其海中此屋久嶋徳嶋其外数十種の

嶋々より異鳥我来れこれハ南風に基にして
吹かれ風に乗して来る赤鬚の類にて名の
志れさるもの多し業るに彼の嶋に中にても
秋に至りて山中より渡りて里に出てたる我
二百十日の荒のことき大風に逢て吹き揚ら
きて四方海上西へに出る変なき故に薩州の
地に来る毎年秋に至れハ官府より出ハ出りて
此等の鳥我捕へしむ風に伏れ海邊の海宗
息いて飛ぶを得ず或ハ手にても捕へ竿に先
に綱我附て捕る網に付るもあり多くハ傷ひて
網を食ひしてて死ひもあり是れ皆隨所の諸
嶋又薩州の屬嶋より来る嶋多なり毎秋捕へ

たる中に一種二種ハ名国の志れとて多くあり
是等ハ南方より渡り来るにあらず其大風の
為に来るなり志るべし又嶋百舌嚢（マヽシ）の類ハ
南嶋より渡来ると云説あり是ハ八丈嶋の如きの
近嶋なり他にあらず地方なき故に渡り来る
なりこれも多くハ南風に乗して渡り来るなる
歟し又奥州羽州の深山の中に伏火黄と云有
秋に至て終に其を道の村中に出て村民常に
捕る事あり其をく渡りかる事なし又日州の
深山に赤丹（アカタニケ）下帯と云あり是れもその山下の村中に
出て居り他に出る事稀し尚又諸州にも
挙て盡しかたし其國の人に問へとも志るもの

なし弔ハ如く好く云山中ハ探り云村民ハ冥ハ
形ニ始ニしる事ハ所ハ此ハ鳥ハ八九月ハ始めて
山中を探れハ果して奇鳥ハ見ハ奇鳥のことなら
次法鳥ともに解りて無く衆ハ来る又聲ハ揚
で友を呼ふハ必ハ此二ヶ月ハ在り陽霊ニ陰ハ
移る故ハ草木郎ニ葉ニ多獣郎ニ友ハ
呼ひ云事ハ志らしむる事如此

捕獲

大鳥小鳥ともハ捕るハ法程くあり法ハ云法
一ツなしハその在金ハ製度も亦ニ不同その地ハ
固ニ事ニ便利ハしニ世類ハ仕方あつて見
非ニ人の手ハ落るハ秘法あつても無し弔此等ハ
法ハ集て冊子ニなし若付呼ハ千鳥ハ云志ハ
とも殺生ハ何國も同し大禁なるに因て秘し
て世ニ伝ハ弔固より千巻ハ著述を果さん
事願ふ故ハ漫ハ此等ハ著作を為して云類ハ
充のこ

羽糊鳥

山雀　小雀　柄長　繡眼兒
眞鶸　河原鶸
猿子　頭高

已上八種鳥ハ前ニ云所ハ遠山より諸方へ
波来る多ハ高く飛り故ハ高羽糊ハ
捕へ居し云仕方ハ喬木の上ニ木ハ立て車ハ

付て籠成幾つも引揚て別の木の枝に糯を
塗りて其喬木の頂に立て亦き諸鳥来る
粘されハ綱にて下に引垂て取るなり海又
此羽棚の仕様も諸国にて程く異なり水府
にてハ大州に索成幾くれも尺斗りに結付
此索に籠成幾つも垂れて其喬木の中程に斜に
立て亦く一體鳥多き事故多く粘著て江戸
なれハ鳥少く取る者多き故至て捕へ来し
諸鳥飛来て其籠の中の声を聞き亦
見て其に其糯に集るなり水府にて是を媒を
亦く時ハ何れにて曾くと思ひて飛廻り遂に
集る事を失て是を聞くなり鳥を云ふ事ハ此

分ケなく捕へやすし

綱鳥

上鶲　黄鶲　鮫鶲　瑠璃鶲
頬白　頬赤　益子　野地子
蒿雀　頭高　菊戴　四十雀
鴨鶡　赤腹　鶇　鶉
鴆　雀

已上十八種々一雙ツ来り或は亦て数十群飛
して来り地に低く横に飛ぶる鳥なり是等の
類總して綱鳥と云て綱にて捕へやすし
其綱の制諸分に何りと雖も所にありて天綱
と云又遊絲と云又張切と云江戸にて晝天と云

是れ糸ハ二ツ立の二股（フタツ）なれバ也糸屋ニて網
スカと云ハ一ツ目を百ニ掛て糸を蛙股と云ニ取て
串の綱の目と是り四角ニ目ヲ開くに様ニあむ
なり其目五分或ハ六分七分ニても作く伊の如き
小鳥ハ貫る事ゆゑ五分位ニてよし引延て
八尺なる時ハ其目は角ニ張て六尺ニなれバなり
凡此積りニて其長さは定むるなれとも
長さ十間の網を割て是れハ八間の網一反ニ三間
の網一反と二通りニ割して編くときハ張る處ニ
依て至て便利なり其目を百掛てたるも
二棚取り四方ニ細き糸を入て又中ニ一筋
入て左右ニ篠竹を立て引張り幅六尺位
五尺位ニ張りて張り網ニ五六寸位の處ニ張る
なり囊の深さ袖兎の費なき事なし其中の
糸も糸を二筋入て三棚となる四棚五棚の大綱ハ
左右の竹も大竹ニて上る事を付けて引揚げ
引かける其鳥を何ほとしても深ければ乃ち沢
山かゝる繳遍も真直ニなる様ニ染むべし大
網と云ふハ渋ニ染て染めよし紺
染て日乾し乾きたる白豆を一夜水ニ漫
し其石臼ニて挽き其汁を取りて其乾き
たるにひたし此汁ニて黒くなる事なし
大小ともニ渋る汁ニ仕立ての上ニて染むべし
色染きはの日ニ映してうくやきし此網を

あり多く此雀が遊ひ掛て一度に百も二百も掛る
なり其雀遊れて一同に飛立て其網より遠
に上ヶ飛ひ去るをきく時ハ笛を吹て其外
声に驚て急に下て一同に其網に掛る此笛
なき時ハ必其網に掛る事なし

駭笛（こゑふへ）

笛此製も色々あり　如此鉛にて鋳て
作り胴にても作る　如此竹にて作る

竹を切りて小き穴を明通して両傍へ貫き
口に含て息を中に引く時に雀此聲に遊て
外此雀に志して飛付此笛を為れば皆
此声に迷て飛て藪に入りしかいなる故に集て
網に赴く事また一ツ」

打網

蒿雀　頬白　頭高　雀

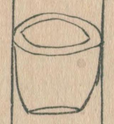
鴿　鳩

已上の六種を地にわりて網を求ことが能き
故に地より網をこえて網に集りたるを網にて
打て捕るなり一網に数十羽を取る事ありて
其網を麻の糸の能きにて其目を五分七分
より雛網ハ一寸五分位網を二寸位て其鳥に随
て大小あり小鳥ハ長サ六七尺位なるよし大
鳥ハ二三尺其周ハ網の中程に至て廣し始
より一目つゝ殖（ふや）しつゝあむなり四通に麻索を

入るゝ手竹ハ入れ杭四本ハ付く和杭ハ付て和
並きゝ手縄と云数丈の索を引て引きかゝる様
小さ雁なりは穂打とて稲の穂ハ並き穂に
付るを引くかゝる時ハ一綱に数百挿る事
あり此綱の製法國にてかし不同あり何れも
用て便利なる仕方にしたし網免並く時は
柿浩を引く能く乾して仕事並れり

雉綱

雉子及鶴雉ハ食物の佳品にして綱するハ冬
月に至て山野の事に来りて游ぶ所に横二尺
斗長サ五六尺に土ハ掘り揚て其深サ尺斗
に中の土ハ染して麥米なりハ其土にかきませ
て並く時は毎朝毎夕来るゝ家ハ此中に胡麻
ハかしつ散し入並く時ハ実小悦て遂に高
承事なし亂に蕎麥雉に胡麻とて此味に
碎ふとゝんくり頓し也又其邊に茅草
なきにて小屋ハ作り並き毎朝毎夕時刻たる
ハ来る事なりハ右の綱ハ仕掛て此小屋の
中に来て其家ハ所ハ手縄を引き並ニ捕
ハり尊て又其小屋に来て笛ハ吹ハ其所に
寄る仕方あり笛ハ角に作りて其雌の雄ハ
呼ふ声ハ為ハ時は其雄悦て走来るこれを
呼子笛と云



是ハ合こゝ吹くせ

脛拂

綱を喙む所を五羽も七羽も一同にして拂ひ
殺し捕る事なり木の杭を三本地に打込ミ
八九尺の大井を引き曲てまた元を其の杭に
結付くまきまた元の縄を引く時は一度にまた
てまた雉の脛役を拂ひ倒す或は又大井の
竿を引曲て土や芥なと掛て陰し置き其身
より引く拂ふなり仕方能き時は一度に能く
倒す事なり

自被

二尺或は三尺の綱に両傍に竹を入る二方には
麻索を入る 如是杭二本を深く打込ミ麻索
を二筋にしめ両傍に能くと先てまた二筋の
間に縦に竹を透し 如此にしてまた縦井
を以て一様に思して称しる物に能く称しり
てまた縦井の代りに綱の竹を入るの井二本
也もに能き塩梅に入る時はまた索称しれてまた
綱地に付くなり地に付くを引返して向に称せ
て小走(ニハゼ)に仕掛てまた小走に稲の穂なと能付
置き綱には芥なと散し置く時は鳥来て喙
また枹を引く時は綱自ラ被るなり大鳥小鳥に
よらず能く捕へるまたの物なり

覆綱

奥州會津には王の木と云木なりまた葉は能く
楡に似てまた枝夷傍に冥きて生ず是を切りて

其先キ曲る時ハ自ラ玉の形になる是れに綱ハあみ付く用ゆ此木なき時ハ竹にても或ハ茂なとにて其圓くしてく綱ニ張るべし山野にありき鶉此児婦の雛ハ自在に覆て捕る所り若し又網を放した所時も此掛なしでハ遠くなりて捕へかたし又庭籠の中の大鳥ハ必ず是れ故用てはし小鳥も是れにて捕る時ハ怪象なし

灘鳩縛（ハヒキ ハヒ）

夏月稲の一尺斗になりたる時に所々ハ徒々に鳴声あり先ツ細き竹ハ立て路を遮り其間に通り路をあけて麻糸を垂て輪にして引きさゝめして悲く時ハ此笛此声を学て来りて首を入て掛る所り其笛此製ハ〔　〕如此に竹ハ切りて穴ハ明けて両竟を塞きて吹く時ハ灘鳩の声のさとし是れも数く吹く時ハ灘鳩も笛の声たる事ハ志つて来る事なしかし吹て彼にも誘る様に吹き吹かしむるなり吹き方にて志に来る事あり捕へて糝（ヒエ）子ハ所に漫して網付る捕て十四五日も過れハ能く鳴く掛なり夏月夕方の楽しみにも高く面白し弔も馬尾ハ以て輪穴として数く獲なり

軒打（フキウチ）

形の上に茶ハ敷し能く網に付て垂き圓扇此骨に糊を塗付て其形の上にはして啄む所ハ

下より打ツ時ハ其糯に二羽も三羽も粘著き乳
事あり是れを雀の形打といふ

篦落（ザルヲトシ）

庭圃の男に米豆なと散し鳩或ハ雀蒿雀
我個付置き篦我落しかけにして索我付く
をくより是引て落し取る其傍に穴我掘て
籠の戸口我付く篦を引寄其籠に入るなり
是れも色々籠に移し方あれとも誤て殺つ
事あり此穴より取るハ便利なり

籠落

籠の戸口の如て落易き戸口の籠我用ひて
横に止木を似りに浚し細き竹我立て其止
木に落ぬ様に止免其外の先キに黒糸我付て
戸口我引上ケ其細外に殺付ハ籠の上の同に
透して其止木を上て置くれり蜘蛛幾何も
細き黒糸或ハ毛なとにて鉤置く時ハ鶯来て
彼此廻りて遂に其戸口より入る其止木我
踏む時ハ其に下りて其戸口自ラ落るなり是
に鶯の来る篠外の殺の中に鉤り置く時ハ
果して捕る事尤易し

丁落（ミモクヲトシ）

八月の此より山野より鳴の多き所より
鳴の姉我置き諸方に三四尺の竹我立て五
寸斗の木に糯我付く ┬┬ 如此して置く

時々妹の鳴くを受き来るく此上に止り粘着を
水府にてハ鵙落と云

鶇落（ウラマ）

長サ五六寸の彼外に細き竹を
糯を付く蛯蟈蚯蚓（ヒヨツ）などを飾り置き此飾く
我見て来る事なく常にて引く時ハ背く糯を
被りて飛去事なしして人に捕ハ赤腹も
此仕方にて取る事也 是を挑烟の棚と云

鴨鶻落（ヒヨトリ）

冬月常に鴨鶻の来る来れ上に南天の實を置き
置くせこうつに糯を塗り置く時々来て来る粘
着を無く白河の人詰ニこれを用て多く捕る也

雁鳧

草鳥頭（ハリカブト）の根を掘り取る生や巴豆を少し
入る擣き合て膏となし荏油を少し加へて
鯽魚なとの後に入れて喰しむ皆醉て飛
上るく落る早く玉を加ふせて取るへし久しく
水に在る多く水を呑むときは自ら活て此事
久しく日を経る時ハ肉色赤こを生ひ急も亦
早くぬけやすし志うれとも人食してハ玉毒
にあたる事を学ひ只その味ハ遥に劣れり

糯製

日州霧島山の中より出ひ貝多羅の糯なり
糯白しして極上なり山人此樹をノニキリと云ふ

葉は色に糖歯ありて糖のことし八月彼岸の
比此樹の皮を取て沿の中に入至事十餘日成
殆ど出し石臼にて擣き煉し糖一所に聚
る小さき中に熱湯二三物を投して急に清く
時々此湯を得て一所に聚るなり又半切桶に
沿湯を入て沿湯の中に此糖を投して洗淨
すれば如くして其滓を取去れり これ成又
水に入て自凝して燈油を以て雜合て壺に
入地中に埋ミ至て時ハ歳年至てもこゝわる事
なし又本曾山より出ほをよしとは其分白河
乃甲子に大糖と云本あり葉ハ[illegible]の如くして
圓く鋸歯ありて此木の皮を取て生にて擣きて

亦小糖となる是の糖を色白して上品なり又
糖木にても八九月の比皮を一所生にて擣き
糖を取る何也も上糖なり樹も糖出る凡其葉
乃ある木此皮を打て粘り出る木ハ糖成取る
屋し隅分の山中に土山糖と云なり山卿の大
樹此下に生ほ土成被り菌の如く出るを形地苺
の如く赤く出る是れを掘りて其根ハ佛雲蓑
此也とし是成洗淨して擣く時ハ糖となる
志かれども久しく終ハ事なりしさる屋し凡ソ
糖成候ハ小さ夏月ハ生糖にて冬月ハ燒
油を多量にて糖を練合て焚生にて初めて
繩にても升にても塗付れハ雪中にても糖此

凝る事なし蜘蛛にて煮る時ハ鶏にて鳧鳬
小ハ宜しかれ竿糯ハ蜘油をかしかて少
し煮こし煮て使ふ時ハ草木の葉に付く
事なりたとへ物に付ても離れ易し小鳥ハ
粘しても尾羽の傷む事形し

糯竿

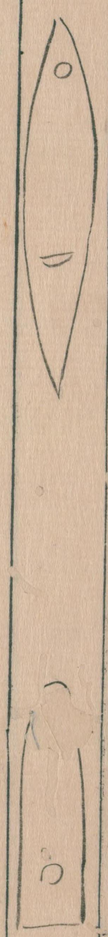
糯竿ハ使ふも甚多ハ一事にて至て面白き
ものなり本草鷓鴣の條下に云く獵人因以糯
竿粘之是れ竹竿にて粘して取るなり竿
制ハ先ツ能き篠竹の変を見て反生したる篠竹
ハ其年の八月に切り取りて[illegible]節ハ制ヲ
洗浄して炭火にて本より末までの油を去り
板の上に並きて手拭なとにて炙りてハ[illegible]
出きて本ハ末に至るまで去[illegible]
其同律節ハ荒島の中に生したる三尺位の
篠の枝に葉の付くるを切り二尺五寸位に取り
油ハ去り茨の根或ハ木槿にても五六寸に切りて
濃き木糯にて志かと指込み接口ハ能き麻
にて巻きかゝ然る上に漆ハ塗りて同律節
とハ竿の本に銅の石銜を入るなり此石銜の
所ハ一手にて掘りて自然に使ふやうに煙きを
よしとハ其長サ二丈より二丈一尺位なるとの
なり是れも詰かにて長短同しかれハ竹も
亦々也々ハ[illegible]にても多くハ莖竹と云篠の

如く細く長き染れる竹あり是にて作るなり
志かれとも東都の父人(サミニ)の拵ゆ拵るハなし

寄笛

雀ハ笛にて寄り集る父人ハ是れにて拵し
鶫なとも笛にて驚して其くみたるを拵す
れり今人口笛或ハ呼子笛にて其身は声を
おして集め取るなり是も古より是あり或ハ
或風風来復と云も亦其声に依て求む故之
又案るに列仙傳曰簫史者秦穆公時ニ人善
吹簫能致孔雀白鶴」是を考るに其声に
感して来るなり今の喚子笛ハ其に其鳥の鳴
聲なる故に友として来集するのミ今の寄笛

此製作左の如し



右の志とく竹にて作るなり雀此声にて集
取故に寄笛と云

飼籠鳥卷之三終

飼籠鳥雞部目録第四卷

滕成裕曰雞ハ陽にして先ッ羽を振て九聲を鳴く雉ハ陰にして二聲を鳴て後に羽を振ふ時移り刻至るハ天の常なり是故に雞々陽に属して先ッ是を知る章攀地震ふハ地乃変れり是故に雉ハ陰に属して先是を知し是乃陰陽家の師とする所にして雞乃時刻を知り雉の地震を知るのミならず萬物皆此理あり

飼籠鳥雞部目錄 終

人上十六品

家雞 陽春縣志
白雞 本草綱目
山雞 陽春縣志
長鳴雞 高丘縣志
矮雞 水草綱目
吐綬雞 本草綱目

黃雞 本草綱目
烏雞 本草綱目
黑雞 職方外記
西洋雞 嶺南雜記
反毛雞 本草綱目
烏骨雞 本草綱目

朱雞 本草綱目
太和雞 中山傳信錄
長尾雞 高丘縣志
馬雞 陝西通志

と云

黄鷄（本草綱目）是れ朱雞の雌なり醫家の茶食すべ
に使ふハ多くハ黄雞となり

朱雞（本草綱目）一名丹雄雞（本草綱目）載丹（同）
大小あり惣才赤し俗に醒々と云冠も尤真
紅なり載丹と名るゝ茶に用ゆ此雌の黄雞に

白雞（本草綱目）
大小あり尤潔白なるものあり豆腐の湯にかく
時々浴すれハ雪のごとく明白になれり

烏雞（本草綱目）
大小あり俗に真黒と云食用にも茶にも悪し

一種頭上黒しく髪を結ひたるが如きを孳子と
云

一種縄赤して胸黒きを油鳥と云

一種黒白お雞を碁石と云

一種袍白く胸黒く背ハ雜色ありて尾ハ黒し老
して脛に細毛を生ぬ距にも又生ぬ尤大小し
て足高く尾も大小して三通りに出て垂る故に
此種を袍白と云

野外の色尤美鷄多し日光の山内別して形
色美して種々此名号具足せし雞あり得て
愛玩すべし其名号一々後篇に詳に出せり
凡此種にして脚高く尤大なりと雖も闘に

なしさ我家鷄と云花鏡に草雞といふ乃此
方の地鳥なり只食用になるなり
一種筑後の邊に生ずる形色は常の雞にし
て頭上に黄毛ありてその形菊の如し俗に是
我菊頭と云鳥骨雞に相合する時は此菊頭
を変生すと云
一種番雞と名て毎年阿蘭陀人食用の為に
持来る余先年長崎にあるに親しく是ばかる
に乃和の地鳥にして大小形色種々ありて又和
品と頗る異なる変なり珍し何人西洋の諸國
我種々求めたる故各々その國國雞にて尤珍玩
すべきものなり長湯の人は常の事にて更に
意我留ばしく顧る相なし日々食し終て
又日本の雞を求め帰る
一種圓羽と云あり暹羅(シヤム)にも常の地鳥にもなり
羽の先き尖らずして圓し
崔豹古今注曰雞一名燭火
韓詩外傳曰雞有五德首有冠文也足持
距武也敵在前攻鬬勇也見食相呼仁也
守夜不失信也と云是の故に德禽五德禽
乃名あり
卓氏詩語曰雞寒則早鳴古曰寒雞半夜
啼此説試に真に然り
地福奇書曰雞種霜降時收形に毛浅脚

細短者佳雞栖宜據地為籠ニ内著棧可
免狐狸之害若焚柳柴小者死大者盲以
油和麪捻成指尖大塊日與十數枚食之
或以上硫黄研細同飯拌匀喂數日即肥
生雞初致家便以淨温水洗其豆放之自
然不走
東坡物類相感志曰雞下卯晨則雄暮則
雌日中對日下亦雄又曰雞喫猫飯自啄
人又曰母雞生子與青麻子喫則常生不
抱卯又曰雞黄雙者生兩頭及三足雞
黄雙ならハ二頭の雛を産ひ先年薩摩の鹿
児嶋にても二頭を産ひ飼を與へる時ハ雙の首

にて相共に爭て食ひ其他雙頭の物帝にある
事ありとも長しかたし往々にて雙頭の説
なり往年淺草の觀音の堂の前に一の白雞
あり首の容全く烏骨雞にして眼色尤似たり
其尾より脚の形を似て距七指ありて六ハ指有
乃雞の距と烏骨雞の距と一聚に生し甚々
惡しき容なり
拾遺記曰漢武帝大初二年月氏國貢雙
頭雞四足一尾鳴則俱鳴 此説を見る時ハ
亦々成長しきりしとも云ひかたし
魏收後魏書曰正始元年夏有典事史元
顯獻四足四翼雞 此説を以てみれハ實に

変物なり

蓬窻日録曰漢中府洋縣有九兩雞生山谷間十數為群凡重九兩

大和雞 中山傳信録 一名

和名 ハンチヤボ

先年薩州に在て琉球人某に請得し雞類を尋るに皆日本の地雞にて闘雞に用ゆへき雞なり其中一種高く小なる物に是あり日本の南京チヤボにあらず乃テ日本に所謂ハンチヤボなり太和と云々日本と云事にて乃日本雞なれど或ハ今に唐土の雞類も来りて居る故に是等を別ッ故に太和雞と云のみ

中山傳信録曰太和雞以常雞特に短足尾長種出七島 此七島ハ薩州より琉球に波子海上の島なり寶島 平島 口島 中島 惡石

島外蛇島諏訪島是れ我が世島ハ乃チ薩州
地方の地島を得て飼ふなり各の農家にハ廣
下に木を渡して樓しむ世説我細に尋るに
古の塒のことも知り甚る古體なり
詩経國風注曰鑿垣而棲為塒棲於栰為
桀」乃チ皆此類なり其諸島に飼ふものハ自然
と遠く離て狐狸の為に害せらるゝ事なし

山雞 陽春縣志

甲州の山中に雞谷と云ひ谷中に自然と
雞多し捕来て米粒を與ると云へとも食ふ
事なし只水のミ飲ふて一二日の内に遂に自
然とまた隅州の須木と云ふところなり此郡中に
自然と生ひ村民籃を携て草間を廻覧し
て卵を拾ひ来る事山林の間に棲て狐狸の
害に遇さるを鷸雉(ヤマドリ)のことし本草別録曰雞
生朝鮮平澤と云れ元来山間に生る鳥
となり故に本草に原禽の部に入る事なり
是し

職方外記曰又近(キンチ)匏奴亞一鷄島滿島皆
皆鷄自生自育不須人畜又絶非野雉之
属」尚此説我見れ山野にも自然の雞ある所
なり又琉球の諸島の如し人畜も自然の如し
陽春縣志曰山鷄形與家鷄無別但不同
農所謂山雞毛羽如不知家鷄能報曉也

味以家更勝 されハ乃チ山生の鷄なり

黒鷄 職方外記

長崎の吉雄耕牛翁云く阿蘭陀の人日用の食とする國に至れハその産の鷄鴨を求むる味ハ皆相同し往々載来る黒鷄尤大なるなり其肉硬しく味高く惡く是れ一物に至て此鷄を得る皆純黒なりしく光澤なし其物の人も皆黒色なり案るに通雅に所謂黒人國にして古くに所謂崐崘奴なりて黒色なれ為る事天地乃志りしもる所なり

職方外紀曰利未亞東北近江海處其國甚多人皆黒色所産雞亦皆黒とす果して此鴉を得て来る雞なるべし

長尾雞 高丘縣志

和名 トウマル

元来朝鮮より来る色白をよしとす純黒なるまれなりその形常の地鶏に似て其高二三尺に及ぶ冠五寸位に下ても亦垂る其ハ七寸餘なる物あり日々人の津液を手にて塗り附れハその色益赤し又大にして倒る事あるハ鐵の筑を焼て左に倒るれハ右に焼き付右に倒るれハ左に焼てよし其癡愈るに随て皮釣りて真直に立なり愈て少しく倒る事なるハ幾遍も焼て其事に立もへしそ尾ハ数色なれ

なれども長く数多くあるは黄ハこれも時々
豆腐の湯にて浴し指にて其羽をこきて洗ハ
又折れ或ハ短く癖あるハぬきたりて新に生ハ
根に手入れしし飼法ハ米麥黍荏にて宜し
時々葱菜の青物を與ふ此雞爭鬪に用る物に
あらず只玩弄に高ふ物なり兎角尾羽の潤澤
なるを貴て玩覧する物故食物を吟味して飼ふ
へし

一種先年唐舶より来る惣才潔白容は鶴の如し
冠尤大にして赤き事猩々緋の如し本朝食鑑に
云く唐麻呂是れ中華より来るの謂ハ麻呂は
古へ男子の通称なり其中冠の大鋸齒の如き
の物ハ大鋸と称ハ是時の純白にして脛に細毛
なきを貴ふと云

長鳴雞 南丘縣志

唐麻呂と地名此間にてその聲大にして好て
鳴く是も大にして唐麻呂に生きあり能く鳴と
雖も毎刻に鳴く事なし

幽冥錄曰晉兗州刺史沛国宋慶宗嘗買
一長鳴雞愛養甚至常著窻間後雞作人
語與慶宗談論極有言説終日不輟慶宗
因此功業大進声の長きに能く鳴と
云事なり

西洋雞 嶺南雜記

和名ヲランタケイ（大和本草）シマヽル（長崎土名）

先年阿蘭陀人食用の餘只一雙を載来る長尾鷄に似て尤小くて色尤見事なり頭の色赤黒にして只冠赤く甚だ珍しき容貌なり惜ふ如忽に殺して釜中に投ぜ此類の事甚だ多し

嶺南雜記曰西洋雞頭高尾趫與常雞甚異亦有黒白雜色諸種此説よりこれハ毛色か種々なり

馬雞（陝西通志）一名番雞（五雜俎）鵾鳥（典籍便覧）

和名シヤム

元来暹羅國よりきたる故に名付シヤムと云ふ暹羅雞なり俗に誤てシヤモと云ふ昔し阿蘭陀人食物の為に其國より求めたる今は諸國とも小畜にて鬪しむ其高サ二三尺金才赤色にして多くハ裸なり其冠も赤く塊にてこんなに堪へ案るに唐土にても此シヤムを用ゆ宋元の比より以前は常雞の大なるを用ゆるへし左傳郡公の鬪雞の事を見れハ其来る事久し太平御覧に寒食の日ハ鬪雞の戯を為す日本にてハ朱雀院の御宇に天慶元年三月四日に鬪雞を始てりし事なり此以前此戯なる事なし天慶元年ありて我朝に於て鬪雞の源とし近時諸家に有

と雖も皆市人遊戯の戯たるのみなれば常
雞を用て鬪しむ故にあらば和漢共に暹羅
雞を用と志るべし近時東都の市家に養ふ
者種々の毛色ありて一戦場に出して勝ときは
種々の名を命して美賞を所謂力士の名の
ことしき名高きは價も亦高價なり後世に
此雞のみ鬪場に出す事を志る古人の人は後世
此雞あることを志らば嗚呼是より後は皆此雞
此事多うるべし此雞老へたるは脚を湯に浸
して脛を去して若雞に仍て其爪を茶碗の
破片にて磨き鬪しむ薩州にて鐵にて
加此物を左右の撃爪に其を系して法ひ
付て出鬪しむ東西一争して羽毛共に一発して
黒血地に流く眼前の勝負戦場に出乱るが如し
いまだ他家に此撃爪の爪釵を用る事を聞ふ
業るにこの釵を用たる事唐土より傳りし
事なり
呉外國傳曰扶南山范尋以鐵為鬪雞假
距與諸將賭錢此説よりおこる事なり
凡鬪雞負る時は其場より鷄の冠を削去て
再び鬪場に出さぬ様にて飼法は常に小麥を
与ふべし米粒は才重くなりて小麥にはしかし
時々米飯に味噌汁と生の葱を細に割き是を
かき雞々与ふべし格別に力付くなり或亦

荏子牛蒡子胡桃の肉を粟飯に和合て与ふべし
甚く弱りたれども常に与ふるに及ばず闘傷
にあへる際前に用ゆべし又甚く弱りたる時は
録鶏及牛節を下飼にして十日許り飼ひて
五七日前には飯に雪花菜並に牡蠣を雑せ喫せ
庭中にて終日鞭て其力を附け其羽を帯せ
しむ是は一才の勝を去りて才猶く其力常に
十倍す又牛節及鼻蛇の細末を与ふる時は久闘て
敵を弱らしむ是は闘鶏中一の秘伝なり
又雛を取るにはおもに此飼にて雌を養ひ
別に至て常に雄を見せざる事久しく春暖の時
良質して時を見合て此飼にて養ひたる雄を
合せて卵を取るべし合せざる時は雌に牡蛎を与ふ
る時は其卵実して破硬し先其卵を秤して
目方の重きは雄なり大小同じくして目方の
軽は果して雌なり此法試みて皆違ふ事なし穀
より五七十日の内に時々蚯蚓を与ふ実は病無
事なし折々は飼ふ又黍を二三日に一度づつ
与ふべし病あらば右の荏子胡桃の肉を与へて
養ひ置に追放て飼ふ時は其力尤つよくなるなり
三都にて富家には此法なき故に闘場の勝負忽に
決して何の益なし今人も其好を志す
さる所は自負の意にて元来其の仕方を知らざれ
ば好は都下の雛を闘しむるは小児の角力の

はとし此都下は風はこれのみにて粗忽錢思
まくて日用を送る故なりとしかれども鬪鷄は如此
は奈ん志為るに及ひ聊か此法をしらに載せらる
世の鬪雞家の音信にしてむるのみ案るに支
ゑり鬪雞の戲なれとも常の雞を用るなり
暹羅を用るは今世の事なれとも鬪雞家皆
此申伝しらはして暹羅を以て古へを説く事
笑ふ可しを其鬪雞の戲あれとも常の雞を
以て鬪雞とする事を志しらはは鬪雞
の戲世小絶へたるか如し又案るに鬪雞も小なる
にあらは

五雜俎曰番雞高五尺許白色黒文狀如
鬪雞但不聞其鳴耳志ふ乃ち三ヤム有り狀如
鬪雞といふ番の雞の大なる物云是れ乃ち日本
の古へは鬪鷄と同し不聞其鳴と云は晨昏小
極て時を作る人の用小立事れし其鳴声
なきにあらは只雞のことき声を出すのみなり
先年有榮泊人の画ける番雞を見るに日本小
生産しるものと容貌さらに同しからは
其色青緑もあり是乃陸西小所謂馬雞と名
て乃ち三ヤム有り

陝西通志曰馬雞觜脚紅羽毛青緑

揚州府志曰雞高郵博支有巨雞高四五尺
与人鬪土人以守戸彼の地方皆大有り

爾雅曰雞三尺為鶤
花鏡曰戰強曰鬪雞 此二説は乃チ常の雞の
尤も大なる物なり志かるに先輩皆鶤なりと
トウマルと訓し或ハ亦ミヤムは當ツ皆非なり
本草綱目曰時珍曰蜀中一種鶤雞 是れ
常の雞の大なる物なれ蓋し蜀ハ天下無類の山
國なれハ山章の為に其雛も尤大なるを生し
其大なるより又大なるを生出ハ故にいよ大なる
物を自然と産るなり日本にても日光山の邊の
雞ハ甚く大にして毛色も美彩あり
典籍便覧曰鵾鳥其形似雞五色至冬無
毛赤裸晝夜常鳴好低昂是れ暹羅にして
番禽風あり果して其説と聞に南海赤道
以下の國の産にして頭より胸肋の邊にいたる
毛羽なし是れ乃チ炎熱の地自然と其章を
受て其種に生孕する事天竺地方の人常に
裸裨なるが如し此種を本邦に移して生孕
する時ハ毛羽多して赤裨の変ありしその
鬪し先て其力減する事志るべし

矮雞 本草綱目

和名 ニヤホ 地スリ
元來海舶載來る食雞の一種にして尤も小なる
我南京と云ふ容貌食雞に相同して其頭甚く
大に色美に其尾覆て頭に至る脚至て低く

速に歩行志るし 毛色純白を上とし純黒も
是に次く黒白相雑を碁子と云是も又貴し
雑紅或ハ下とし極紅なるを猩猩と云光沢ありて
見事なり其容貌ハ種々あれとも先ツハ脚低く
毛冠尤大なるをよしとし古今秘苑にも罌粟或
与へて矮雞と為る仕法あれとも只道理のミにて
実に変して小なる物となる事なし或ハ雛を
小籠に入て水をのまして与へて小なる様に作り
たるもあれとも尽くいちけてすくみて病鳥也
見えて却てあしゝ兎角雛より食物を多く与
へて広き籠に入て後ニに撰ひ出て小なるに限り
此色は奇音なりして銭に限く近年ハ文半返にて

一雑ハ大なる色ともあり名りとして尾ハ翅も志けりて
毛冠至て大なるを大冠とて是ハ大鋸冠ともいふ
東都にては時々会集して各美を賞す毛冠時々
葱を浸くまハ色苔なく成る人の津液を日ごに
塗り付る時ハ自然と色紅に信しよりし元鶏也
見劣りなすある時ハ耳白となる耳白ハ云る忌
むなり
本草綱目曰時珍曰江南一種矮雞脚纔二
寸許也 此説乃チ地スリなり
埤雅曰越雞ハ 是も乃チチヤホなり
反毛雞本草綱目 一名翻毛雞 虞衡志
和名 サカゲニハトリ

在間往々見れあり多くハ赤雞にて其雌ハ淡柏(カミハ)
なり又帝に矮雞にも見れなり其種を多く
畜て雛を出す時ハ尤あらしき我出す事なり
しかれども人間にそのかしし
本草綱目曰時珍曰反毛雞即翻翅雞也毛
翮皆反生向前治反胃とこれなり
虞衡志曰翻毛雞翮領皆翻生彎々向外尤
馴狎不散逸二黄皆有
東坡物類相感志曰雞未戒者以笞箒趕之
則戒毛倒生 此乃説未だ試ず

烏骨雞 本草綱目

番名

和名 ヲマツケ 烏骨雞ノ訛言也

元来海舶より来る純白純黒乃二種あり其毛羽箕の
にとしき冠暹羅の如く其色黒く觜及脚足も黒
し是の故に醫家の方書に烏骨雞とて薬に入ハ
烏骨とハ觜脚の黒を云なり其の肉の黒き雞乃
中に於て骨黒きものを擇て来て烏骨のものな
し又俗に烏骨雞ハ毒ありと云是誤なり
本草綱目曰時珍曰烏骨雞有白毛烏骨者黒
毛烏骨者斑毛烏骨者有骨肉俱烏者肉白骨
烏者但觀雞舌黒者則肉骨俱烏入薬更良
此説に於てうるへし毒なし
東坡物類相感志曰烏骨雞舌黒者則骨黒

古不黒者但肉或ハ云く黒色の雞ハ總て美
味小なれ其卵も白羽の物ハ次なり
吐綬雞 本草綱目 一名綬雞 通雅 吐雞 黄巖縣志 錦雞 同上 錦囊 古今注
採囊 南産志 綬鳥 坤雅 孝鳥 倦游雜録 孝翮 廣東新語 旨鷊 詩経
避採 禽経 日錦 南産志 功曹 古今注 錦帯功曹 廣東新語
真珠雞 蔡氏詩話 阿剌渾 飲膳正要
番名 カルクーン
和名 カラクン 阿剌渾訛称也
近来阿蘭陀より来る往々小飼ふ者なり其大サ
雁の如く羽毛光黒と白とお雜り紫黒して
雞の如く首上小毛なく肉冠ありて脇小いくつ
まて羽毛なし首上の肉冠時あり垂る事三五
寸ニ至る飼を食ふ時ハ綜ニ入れ其奇
形の雞なり其鳴く聲も少しく雞に似たり
近時ハ純白純黒或ハ柿色なり其壽久し
うしれ其二歳小至るとしたて卵十二を産ひ
四五歳小至て卵を産せしその卵ハ黄雌雞
伏さしむ凡二十一日にて殼とれる先ハ葱
白を時々与へてよし又米麥にて暹羅ハ飼
ふかしむとしまへし又青菜ハ与ふべし
爾雅曰綬鳥也陸佃云綬鳥大如鸜鵒頭似
雉有時吐物長數寸食必蓄嗉臆前大如斗
此鸜鵒ハ今ハ八哥鳥にして至て小にして
是れと並ひ其つき物にあらしハ無ニ其色ハ黒

してお似たると云も志うるし

倦游雜記曰巴峽中有吐綬雞以其羽毛有白圓點又名真珠雞嗉藏肉綬長闊數寸紅碧相間極煥爛常時不見須過晴日則何陽擺之頂首先出兩角肉亦二寸

閩書南産志曰圖經曰嗉藏肉綬天晴則徐舒其綬人謂吐錦

本草綱目曰鷩雉附録曰吐綬雞時珍曰出巴峽及閩廣山中人多畜玩大如家雞小者如鴝鵒頭頰似雉羽色多黒雜以黄白圓點如真珠班頂有嗉嚢内藏肉綬常時不見毎春夏晴明則向日擺之頂上先出兩翠角二寸許乃徐舒其領下之綬長閩近尺紅望相間采色煥爛踰時悉斂不見或剖而視之一无所覩此鳥生亦反哺行則避草木故禽經謂之避株食物本草謂之吐錦鷄古今注謂之錦嚢本綱無一蔡氏詩話謂之真珠鷄倦游録謂之孝鳥詩經謂之鷊音厄卬有旨鷊是矣此説も甚し疑ふべし大如家雞と云今まるものハ大サ鵝の如く家鷄はめきにはしに又小者如鴝鵒と云ふと云ハ一種小れ家鵝もあるか志かれとも鴝鵒は噪林鳥は大サなり如此の阿刺渾もいふるか

職方外記曰北亜墨利加國有雞大千鵝羽

毛華彩時甚味最佳吻上有鼻可伸縮如
象縮之僅寸餘伸之可五寸許
范淶典籍便覧曰避株鳥食必蓄嗉臆前
大如斗恐觸其嗉行必遠草木故名
坤輿外記曰異雞墨是可國有雞大如鵞
羽毛華彩味最佳吻上有鼻如象可伸可
縮僅寸餘伸可五寸許惱怒則血聚于鼻
正赤尾開屏如孔雀
黄巖縣志曰錦鷄一名吐鷄　此説我ゝ
屋し錦鷄ハ鵕鸃ゝ同名なり又錦雞の下に辨すべし
屋し
南産志曰採囊似鷄而小有五色囊

飼籠鳥卷之四 終

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

特
7
71

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用